

# 明治大正期の英語圏童謡受容

—竹久夢二と薄田泣菫の翻訳

風早 由佳

はじめに

明治・大正期の日本の児童文学は、翻訳文学とも言えるほど、外国の児童文学の翻訳、翻案が数多く出版された。これにより、西洋文化や近代的児童観が日本にもたらされるとともに、西洋の新しい印刷技術導入により多色印刷が普及したことが、明治後半に子どものための読みものとしての文学（児童文学）の誕生を後押ししたと考えられている。

本発表では、明治大正期に外国児童文学を翻訳した岡山県出身の詩人、竹久夢二(1884-1934)と薄田泣菫(1877-1945)の翻訳特徴を考察し、双方の翻訳手法を比較することで、互いの影響関係と彼らの外国文学の受容について考えたい。竹久夢二は美人画で知られる画家である一方で、多くの詩を書いた詩人でもある。詩人としての夢二の功績は、英語圏の伝承童謡マザーグースの翻訳をし、明治大正期の日本に英語圏文化を伝えた功績は大きいと言える。特に、大正10年に書かれた北原白秋の『まごあ・ぐうす』より10年以上前の明治43年に夢二がすでにマザーグース訳を手掛けていたことは、日本の童謡史における外国童謡の受容を考える上でも非常に重要な点と言える。一方で、薄田泣菫もまた、英詩に強い関心を持った詩人であった。泣菫は自身の詩作にも英詩のスタイルを取り込む日本初の斬新な試みをしている他、クリスティナ・ロセッティ等の海外の詩人の翻訳を行っている。

本発表では、まず、先行研究で取り上げられていない新たに発見した夢二の童謡翻訳を整理して提示しながら、夢二訳の特徴を分析する。その上で、夢二と泣菫の翻訳を比較し、この二人の外国文学の受容について検討する。

## I. 竹久夢二とマザーグース

夢二作品中のマザーグース翻訳の存在は、これまでに多数の研究者が指摘している。しかし、先行研究では、すでに指摘されたマザーグース訳を取り上げ、異なった視点から論じ直しているものが多い。本研究では、夢二の14冊の詩集を取り上げ、マザーグース翻訳と考えられる作品をリストアップした。夢二訳の特徴の一つは、一見マザーグースからの影響が読み取りにくい翻案である点と言えるが、夢二が独自のストーリーを追加したり原詩を読み換えたりしていることが、かえって夢二のマザーグース観、及び夢二の文学性を浮かび上がらせていることは注目に値する。

例えば、『歌時計』収録の「蜘蛛」を見てみると、「ジャックはお三時の御馳走を／庭木の下で食べてみた。／すると上から干葡萄が／お皿の中へ落ちてきた。／食べようとする干葡萄は／手を出し足出し這ひ出した。」とある。この詩の挿絵には木の下でお菓子を手にした男の子の頭上で、蜘蛛が木から糸を引いて降りてくる様子が描かれている。これはマザーグースのひとつ“Little Miss Muffet”を元にしていけると言えるが、エブリマンズ・ライブラリー版の原詩(1910)では“Little Miss Muffet / She sat on a tuffet, / Eating of curds and whey; / There came a great spider, Who sat down beside her, / And frightened Miss Muffet away.” (38)となっている。凝乳とホエー(curds and whey)を食べているところへ蜘蛛が降りてくるという元のマザーグースの内容に対して、「蜘蛛」という語を使わず、蜘蛛を干葡萄に見立ててうっかり食べそうになって初めて気づくという臨場感のある展開にしており、夢二の翻案的訳のユーモアが見える。また、のちに谷川俊太郎も“curds and whey”を「おやつ」と訳しているが、夢二の「お三時の御馳走」という訳は、原詩の文化的背景、リズム感を理解しつつ出版当時の読者に理解される語を適切に選び抜くことのできる翻訳者であることを示す一つの例と言える。また、画家でもあった夢二の翻訳の多くは、その挿絵と相互補完の関係にあることも、夢二独自のユーモアを生み出す要因となっていることが指摘できる。

この他にも修正を加えながら5度も詩集に収録した“Pussy-cat, pussy-cat”の翻訳について見てみると、“Pussy-cat, Pussy-cat”の呼びかけのリズム、原詩の強弱リズムを日本語詩にも取り込もうとしていることが読み取れる。こうした夢二のマザーグースの持つリズムへの関心、高い評価は、『歌時計』冒頭の読者へ向けて書かれた「若き母達へ。」からもわかる。

この歌は、これまで日本で謳はれた子守歌の調子で謡つても好いのです。しづかにゆるやかに謡つてやつて下さい。

本の後の方に載せた歌は多く外國の童謡を譯したのです。これは聲に出して謡ふよりも子供自身に讀ませて下さい。歌の意味がわかってくれば、子供は歌から得た感情からリズムを呼び起して自然自分の曲譜（ふ

しまわしを創めるでせう。

子供は、生まれながらの音楽家です。

あなたは、あなたの子供をつれて散歩に出かける時、あなたが身装をなさるのを待ちかねて、子供達は、片つぽの脚で片つぽの脚を追ひかけおひかけ歩く歩き方をして、あなたのまへを踊りながら走つてゆくの御覧になったでせう。あの歩き方が、詩が言葉にならぬまへの音楽のリズムです。[...]

面倒な階調を持った歌よりも、単純な素朴な調子とリズムを持った歌の方が、どんなに子どもを喜ばせることができるかを、あなたはすぐ知るでせう。

(『歌時計』8-12, 下線部筆者)

また、高橋(2004)も指摘するように、明治期以降の「日本のうた」は、讃美歌や愛唱歌に日本の歌詞を当てはめていたという。

明治期以降の「日本のうた」は、それまでの伝統的な音楽とは無関係に発達したもので、初期は讃美歌や愛唱歌に日本の歌詞をあてはめていた。そのうち日本人で作詞・作曲を手掛けるようになり、明治 43 年(1910)年に日本人の作品による『尋常小学読本唱歌』が発行された。この著作権は文部省に帰属し、作者名は伏せられて、便宜上「文部省唱歌」と呼ばれていた。一方、この「文部省唱歌」に不満を持つ文人が結集して、大正 7 年(1918)年 7 月に童謡雑誌『赤い鳥』を旗揚げした。以降、類似雑誌の創刊が相次ぎ、童謡は独特の歩みをたどることになった。

(高橋 133)

明治 5 年(1872)に学制が公布され、小学校には「唱歌」の教科が入ったことで広く子どもたちに唄われるが、この頃の唱歌は児童の生活や関心とは異なっていたため、後に「大正期の童謡運動」と呼ばれる運動が起こり、これまでにない子どもの心情と深くかかわる唄を生み出そうとする試みが数多く取り組まれてきた。こうした機運の中で、夢二は当時翻訳が盛んにおこなわれ始めていた外国文学・文化にその糸口を求めたとと言える。

### III. 薄田泣菫と英詩

荒木(1995)が指摘しているように、夢二は薄田泣菫のクリスティーナ・ロセッティ(Christina Georgina Rossetti 1830-1894) 訳の *Sing-Song* (1893) から“A white hen sitting”に触発され、『子供の國』(1910)、『ねむの木』(1916)にロセッティの詩集から同詩を翻訳して収録している。同郷の詩人であり、同じ雑誌にも投稿していた泣菫から、夢二は創作において影響を受け、自身の詩作をより豊かにしようと試みたのだろう。ここでは、まず泣菫の詩作と英詩との関係について考えてみたい。

薄田泣菫は、明治 10 年に現在の倉敷市に生まれ、夢二より 7 歳年上ということになる。泣菫は明治 30 年に 21 歳にして詩壇に登場し、その後詩人として活躍しつつ、新聞や雑誌の編集者としてもその才能を発揮した。40 代には新聞コラム「茶話」で話題となるが、その後パーキンソン病により新聞社は退社し、次第に体の自由を奪われながらも、家族の助けをかり口述筆記で執筆を続けた。また、夢二同様に若いころから英語学習に熱心に取り組み、キリスト教や外国文化に関心を持っていた。この泣菫の詩作における英詩からの影響については、本人も著書の中で何度も言及している。『詩集の後に』において、次のように語っている。

この雑誌[新著月間]に出しました私の詩は、杜甫の『花蜜藏難見』といふ句を題に、長短各種の作を取り交ぜた十頁ほどの長さのものでした。その多くは七五調で、なかで八六調十四行を一つに取纏めた絶句といふのが五六篇ありました。この絶句は私が前からキイツや、ロゼチヤ、ワーヅワースや、古くはペトラルカなどの試みたソネットの眞珠のやうな美しい光に耽酔して居りまして、どうかしてこの詩形をわが詩壇にも移してみたいものだと思つて試みたものでした。

(『詩集の後に』 n.p.n. 下線部筆者)

外国の詩人への関心だけでなく、泣菫が絶句と呼ぶ「ソネット」形式を自身の詩作に取り入れようとしたことも語られている。また、『泣菫詩抄』には、マザーグースの“How many strawberries grow in the sea?”(「海でイチゴは何匹とれる?」)の翻案と考えられる「大笑ひ」が含まれる他、外国童謡からの翻訳・翻案が指摘できる。次の章では、具体的に夢二と泣菫が同じ英詩を訳したと考えられる作品を取り上げ、その比較をして特徴を分析

する。

#### IV. 夢二と泣菫の翻訳比較

夢二は、マザーグースの一つ、“The Robin”の翻訳を複数回詩集に収録している。夢二の翻訳の特徴として、先ほど指摘した翻案的翻訳という特徴に加え、元の詩から要素だけを取り出したり、内容を分割したりして、2篇の詩を作り出している点が挙げられる。この“The Robin”について、夢二は『歌時計』の中では、2篇の詩に分割して翻訳していると考えられる。“The Robin”を訳した夢二の「駒鳥」と「赤い木の實」、泣菫の「冬の鳥」訳を比較してみたい。

泣菫の「冬の鳥」が明治41年刊行、夢二の2作品は大正8年であり、夢二の「赤い木の實」冒頭2行が泣菫の冒頭に非常に似ていること、結末が、どちらも登場する動物を見る語り手が何とも言えない複雑な気持ちになる様子で締めくくられる点など、泣菫訳から影響を受けた可能性も指摘できる。加えて、両作品ともに七五調で展開されている点も共通している。音律について、泣菫文庫調査研究プロジェクトチームの竹本は次のように泣菫の特徴を指摘している。

泣菫の詩の多くは定型詩である。しかし、泣菫の詩は定型といえども複雑に組み合わせられ[……]「わがゆく海」(『白羊宮』)の冒頭「わがゆくかたは、月明かりさし入るなべに、／さはら木は腕(かひな)だるげに伏し沈み」は、「七五七／五七五」の音数となっており「七五」の反復とも見えるが、「第一ラインの終の7は次のラインの初の5に重くのしかゝり、第一行初の7の出と、第二行初の5の出とが対照される所に、単なる七五調とは音脚性格上のちがいができる」(日夏耿之介)と指摘されるように、改行を越えて意味が続く「跨ぎ」の効果と合わせて、従来の七五調とは異なる表現を実現している。音律数の複雑化は上田敏、蒲原有明、薄田泣菫によって追求されたが、その後時代は口語自由詩へと展開する。

(薄田泣菫読本 106)

ソネットを詩作に取り込もうとした泣菫は定型詩を好んで創作しており、彼の詩において、竹本が指摘する「跨ぎ」、もしくは句またがり、動きを生み出し、表現を豊かにするために重要であったと言える。「冬の鳥」であれば、とりわけ第一ラインの七五の終わりの五(終の)と、続く第二ラインの七(赤い木の實が)が強く結びついて、第一ラインから第二ラインへと読者に期待を抱かせつつ、読者の目の動きを推し進める力を生み出している。類似する夢二の「赤い木の實」の冒頭(雪の降る日に小兔は／赤い木の實がたべたさに)と比較しても、泣菫はより句またがりを効果的に使っていると言える。

一方で、夢二は、元となる詩から着想を得た2つの詩を翻訳創作していることが示すように、音と同様に物語世界の広がりへ注意が払われていると言えよう。先に取り上げた夢二の2つの翻訳共に、泣菫よりは緩やかながらも夢二訳も七五調で結末まで進行している。注意したいのは、結びの部分で、「駒鳥」では「あんまり寝すぎて／可愛さうな駒鳥のことを忘れてみた」、赤い木の實」では「兎は悲しくなりました」としめくくられ、それまでの七五調のリズムを崩しているだけでなく、「駒鳥」の方は特に急に現実に引き戻すかのように語り手の存在が立ち上がってくる。このことが示すのは、母親が詩を子どもに読み聞かせたり、語るといった場面を強く意識して創作した夢二ならではの「物語を語って聞かせる様子」を表すために自然な口語体で締めくくる必要があったとも推察される。このように双方共に七五調のリズムを使いながらも、行またがりや、リズムを崩すことによって独自の詩形を巧みに打ち立てようとしていることがうかがえる。

おわりに

本発表では、夢二翻訳の特徴を確認しながら、同時代詩人である薄田泣菫の作品を取り上げ、比較考察を試みた。とりわけ“The Robin”の翻訳では、夢二、泣菫ともに七五調をベースとしながら、行またがりによって新たなリズムを創出したり、翻案的翻訳によって内容面での新規性を生み出していることが示された。

注

興津要編、『明治文學全集 58 土井晩翠、薄田泣菫、蒲原有明集』、筑摩書房、1967。

倉敷市・薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトチーム編『薄田泣菫読本』、翰林書房、2019年。

高橋美帆、「クリスティーナ・ロセッティと大正期の童謡運動」『奈良工業高等専門学校研究紀要』第40号、2004年。

竹久夢二、『歌時計』、春陽堂：東京、1919。